

# はじめに

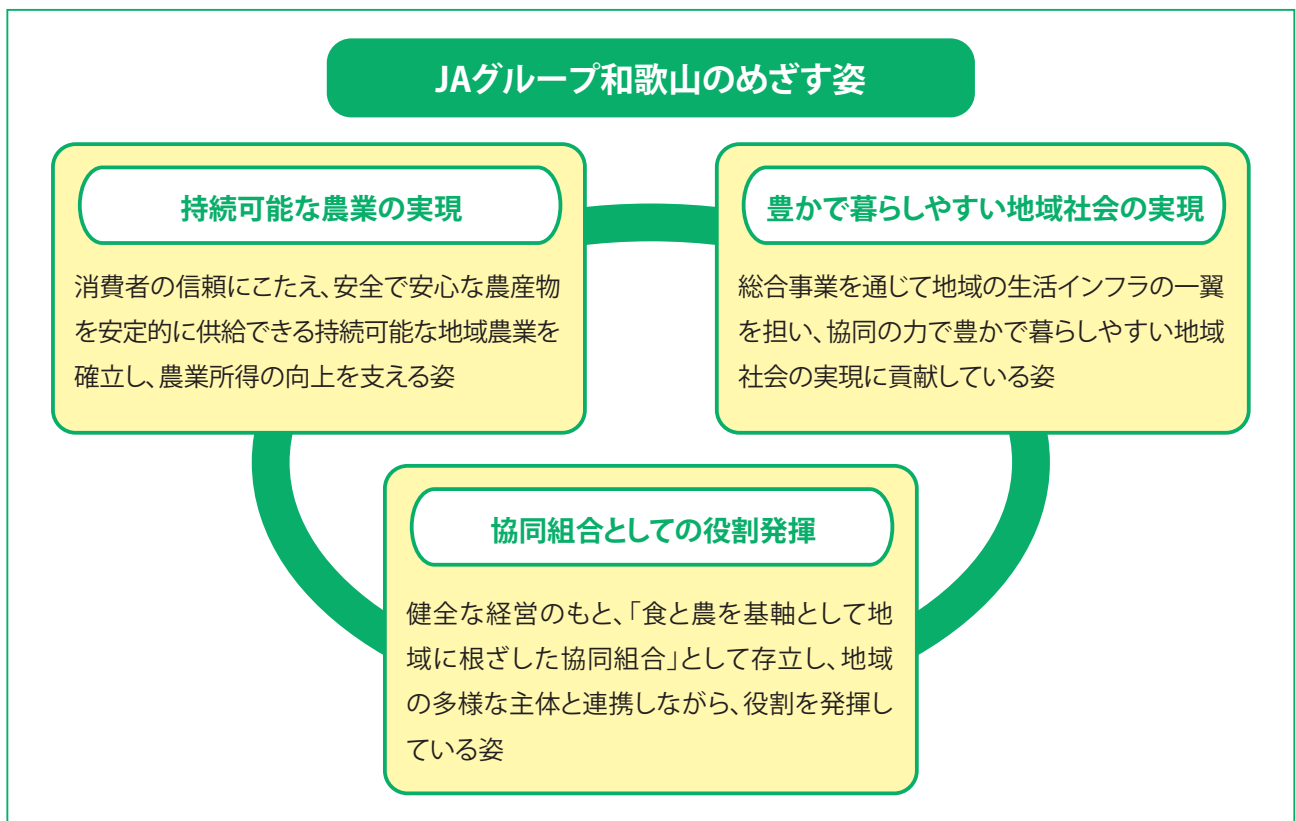
J Aグループ和歌山は、平成30年11月の第29回和歌山県 J A大会において、『魅力ある力強い農業』と『豊かな地域』の実現を主題に、①販売高600億円への挑戦、②組合員のメンバーシップ強化と「地域の活性化」への貢献、③農と地域を支える経営基盤の確立、④本県 J Aグループの組織体制の再構築を重点実施事項として決議し、その実践に取り組んできました。

また、政府からの「農協改革」の提起を受けて、「農業所得の向上」「農業生産の拡大」「地域の活性化」に向けた自己改革に J Aグループをあげて取り組んだ結果、全組合員を対象に実施した「J Aの自己改革に関する組合員調査」では、多くの組合員から総合事業を通じた自己改革への高い評価と期待の声をいただきました。

一方、第29回 J A大会において、J Aグループは「農業・農村の危機」「組織・事業・経営の危機」「協同組合の危機」という3つの危機に直面していることを確認しました。このうち「協同組合の危機」に関しては、「労働者協同組合法」が成立するなど協同組合の役割を評価する動きが見られますが、「農業・農村の危機」「組織・事業・経営の危機」については、いずれも危機を脱したとは言えず、むしろ深刻化することが懸念されます。

農業、農村、J Aをとりまく諸情勢は今後さらに厳しさを増すことが見通されますが、組合員と地域にとって、なくてはならない存在であり続けるため、次の10年に向かって挑戦する J Aグループ和歌山のめざす姿として「持続可能な農業の実現」「豊かで暮らしやすい地域社会の実現」「協同組合としての役割発揮」を改めて提起し、その実現をめざします。

本冊子は、「めざす姿」の実現をめざした向こう3か年の県内 J Aグループの基本方向、重点実施事項を議案として策定したものです。「魅力ある農業と豊かな地域の未来づくり」に向け、大会議案の実践に県内 J Aグループをあげて全力で取り組みます。



# 情勢認識・課題

## 本県の農業・農村をめぐる情勢

- 農業従事者の減少と高齢化、耕作放棄地の増加等により農業生産基盤の脆弱化に歯止めがかからない状況にある中、担い手対策、労働力確保対策、農地維持対策の強化等が求められる。
- 中山間地域を中心に過疎化・高齢化が深刻化しており、高齢者の見守りや移動購買車の運行など、引き続き地域の生活インフラを担うJAの役割発揮が求められる。
- コロナ禍等を契機とするeコマースやリモートワークの普及に伴う田園回帰志向の高まりをとらえ、関係人口の増加や半農半Xなど地域に新たな人の流れを取り込むことが期待される。

## JAの組織基盤をめぐる情勢

- 正組合員の減少と高齢化・階層分化、准組合員の増加により組合員構成が多様化していることから、対話運動等を通じ、組合員の意思反映や関係強化を進める必要がある。
- 特に正組合員の高齢化に伴い、正組合員の大幅な減少が懸念され、世代交代による事業承継への対応が急務となっている。

## JA経営をめぐる情勢

- 農業生産基盤の脆弱化に加え、人口減少・高齢化の進行や低金利環境の継続など外部環境の好転が見込めず、JA経営は一段と厳しさを増すと見込まれる。
- 令和3年度決算期からJA版早期警戒制度の導入が予定されていることも見据え、経営の健全性の確保や経営基盤強化に向けた取り組み強化が必要である。

## 農協改革をめぐる情勢

- 全組合員調査では、多くの組合員から総合事業を通じた自己改革への高い評価と期待の声をいただいた。
- 本年6月「規制改革実施計画」が策定され、懸案の准組合員の事業利用に関しては、一律的な規制の導入は見送られた。
- 一方、「自己改革実践サイクル」を構築すること、准組合員の意思反映と事業利用の方針を総会で確認することとされたため、引き続き不断の自己改革に取り組むとともに、組合員の意思反映に努める必要がある。

## その他考慮すべき社会情勢

- コロナ禍を契機とした価値観・行動の変容、劇的に進展するデジタル化、カーボンニュートラルやSDGsをはじめとした持続可能な社会の実現に向けた要請の強まりなど、現代社会は大きな転換期を迎えている。
- カーボンニュートラルに関連して、農水省では「みどりの食料システム戦略」を策定、「有機農業の拡大」「化学肥料・農薬使用量の削減」等に関して具体的な目標が示された。
- 世界の人口増加や新興国の経済成長、干ばつ・豪雨など頻発する異常気象の影響などにより、世界的な食料需給のひっ迫が懸念されるなか、わが国の食料自給率は37%と過去最低の水準に低迷している。
- コロナ禍による食料安全保障の確立や食料自給率向上への関心が高まりつつあるなかで、国内農業生産の拡大と持続可能な農業を実現するためには、生産現場の取り組みだけでなく、消費者の理解醸成をはかる必要がある。

# 第30回和歌山県JA大会議案の主題

## 魅力ある農業と豊かな地域の未来づくり

農業、地域、JAをめぐる情勢は、かつてなく厳しい状況にあります。JAグループ和歌山は、「めざす姿」の実現に向け、引き続き「農業所得の向上」「農業生産の拡大」「地域の活性化」の3つを基本目標とする「不断の自己改革」に取り組みます。

また、「持続可能な農業」の具体的な姿として定めた「和歌山県農業の将来像」の実現をめざすとともに、「農業所得の向上」にJAグループをあげて取り組み、組合員子弟等を中心とする次世代の担い手にとって「魅力ある農業」を実現します。

さらに、「組合員との対話運動」を基本に、JAへの信頼を高め、継続して関係強化をはかるとともに、組織基盤の拡充に向けて、組合員と農業振興の応援団の拡大に取り組むほか、健全な経営のもと、総合事業の展開を通じて、生活インフラ機能の一翼を担うとともに、地域の多様な組織との連携による地域の活性化への貢献等を通じて、「豊かで暮らしやすい地域社会」の実現をめざします。

このため、JAグループ和歌山は、次の4つの重点実施事項の着実な実践を通じて、「魅力ある農業と豊かな地域の未来づくり」をテーマに、組合員や地域の方々等とともに、農業・地域の展望を力強く切り拓きます。

### 【JAグループ和歌山のめざす姿】

持続可能な農業の実現

豊かで暮らしやすい  
地域社会の実現

協同組合としての  
役割発揮

魅力ある農業と  
豊かな地域の未来づくり

### 【重点実施事項】

生産基盤の強化と農業所得の向上

組合員との関係強化と地域の活性化への貢献

環境変化を踏まえた経営基盤の確立

本県JAグループの組織再編

～不断の自己改革～

## 【和歌山県農業がめざす将来像】

「農業所得の向上」にJ Aグループをあげて挑戦し、組合員子弟等を中心とする次世代の担い手にとって「魅力のある力強い農業」を実現します。あわせて果樹・園芸を主体とする本県農業の特性を踏まえ、生産者組織を核に優良農地の維持や担い手育成支援に取り組み、以下の農業農村の実現を目指します。

- 1 南北に長く、多様な気象条件と地形を十分生かした適地適作による特色ある産地を展開している。
- 2 ドローンやアシストスーツなどの農業用ロボットを導入し、農作業の省力化・機械化がすすんでいる。また、タブレット等の情報端末を利用したICT技術を活用し、栽培技術の高度化・高位平準化をすすめ、労働力不足の緩和と高品質安定生産を実現している。
- 3 消費者の信頼確保と大手量販店や輸出など複雑化・国際化する流通構造に対応するため、残留農薬自主分析の徹底と国際水準GAP（Good Agricultural Practice）への取組が多く産地で定着している。
- 4 果樹では、日本一の生産量と長い歴史に支えられ日本有数のブランドである温州みかん・柿・梅を維持するとともに、桃・イチジク、キウイフルーツ、中晩柑など周年途切れることのない生産を振興し「果樹王国和歌山」を堅持している。
- 5 野菜では、冬季温暖な気候を活用し水田裏作の露地野菜、契約的栽培や加工・業務用野菜の産地拡大と、都市近郊産地での露地、施設の軟弱野菜、沿岸地域のえんどう類やミニトマト・イチゴなど施設園芸産地を形成している。
- 6 花きでは、温暖な沿岸地域を中心に、スターチス、カスミソウなど多様な品目を栽培する中で、県オリジナル品種や新品目を積極的に導入し、耐候性のある施設栽培の拡大により魅力ある花き産地を形成している。
- 7 充実した研修内容と規模を持つJ Aトレーニングファームや農業塾等を県内各主要産地に設置し、各産地で中心的農家として活躍する新たな担い手を継続的に育成している。
- 8 農商工連携や六次産業化を推進するとともに、機能性表示の拡大や地理的表示への取り組みを進め、数多くの付加価値商品を生み出している。
- 9 ファーマーズマーケットでの販売拡大に加えて、観光農園や農作業体験など地域住民や観光客が楽しめる空間づくりにより、多くの人が交流する充実した地産地消産地を実現している。

資料：J Aグループ和歌山農業振興ビジョンより抜粋